

# 旭労災病院ニュース

病院情報誌 第 99 号 平成 26 年 2 月 1 日発行

発行所：旭労災病院

〒488-8585

尾張旭市平子町北61番地

TEL 0561-54-3131

FAX 0561-52-2426

<http://www.asahih.rofuku.go.jp/>

## 高齢者におけるワクチンの肺炎予防効果

呼吸器科部長 太田 千晴



近年、肺炎は本邦における死因の第 3 位を占めており、高齢になるにつれて発症率・死亡率とも増加します。世界でも類をみないスピードで高齢社会を迎えているため、肺炎の予防は重要な課題です。

肺炎予防策の一つとして、インフルエンザワクチンや 23 価肺炎球菌莢膜ポリサッカライドワクチン(PPV23)の接種があります。

ナーシングホーム居住者を対象とした PPV23 の有用性に関する無作為化二重盲検プラセボ対照比較試験の結果では、PPV23 接種群では非接種群に比して、肺炎球菌肺炎及び全原因菌による肺炎の発症をそれぞれ 63.8%、44.8%抑制し、また肺炎球菌肺炎による死亡者も接種群では 0%であったのに対して非接種群では 35.1%であり、PPV23 による肺炎球菌肺炎の発症予防と死亡率減少への有用性が示されています。(丸山ら、BMJ 2010 ;340:c1004)

高齢者や基礎疾患を有するハイリスク患者では、インフルエンザウイルス感染に伴って二次性細菌性肺炎が多くみられることもあり、インフルエンザワクチンと PPV23 の併用が有用であるとする報告が多いです。基礎疾患のある高齢者を対象にインフルエンザワクチンに加えて PPV23 を接種した場合の影響を検討した調査研究では、75 歳以上の高齢者、慢性呼吸器疾患患者、歩行困難者で、肺炎罹患率、入院率、医療費の抑制効果が顕著でした。(川上ら、Vaccine 28,7063-7069,2010)

PPV23 については、公費助成を行っている自治体が年々増加してきており、接種率が上がってきていますが、欧米諸国に比べるとまだまだ低値です。高齢者の肺炎予防のために、ワクチンの接種率を上げることが重要です。特に透析や糖尿病、心・呼吸器系疾患等の基礎疾患を有する患者をみている医師は、両ワクチンの併用接種について、積極的に取り組んでいく必要があります。

### <尾張旭市・瀬戸市での高齢者肺炎球菌予防接種助成について>

対象者：市内に住民登録があり、次のいずれかの要件を満たし、過去 5 年以内に肺炎球菌予防接種を受けていない方

1. 満 70 歳以上

2. 満 60 歳以上で心臓、腎臓、呼吸器の機能低下がある、または糖尿病、慢性肝疾患、血液のがん、慢性髄液漏などの基礎疾患により免疫力が低下している

自己負担金：5000 円

接種方法：(尾張旭市では事前に保健福祉センターで申請し、接種券などを受け取った上で、)尾張旭市及び瀬戸市の実施医療機関に予約の上接種

※当院では呼吸器外来が肺炎球菌予防接種の窓口となっております。事前に予約(患者さんからの電話連絡で可)を取った上で、接種の対応をさせてもらっています。

# 小児急性中耳炎診療ガイドライン 2013年版について



耳鼻咽喉科医師 片平 信行

急性中耳炎は小児に多く、3歳までに約83%が一度は罹患するとされています。風邪などの上気道症状に続いて発熱、耳痛、耳閉感、難聴などが生じます。劇症化すると炎症によって鼓膜が脆弱化し、鼓膜穿孔を起し耳漏を生じることもあります。特に乳幼児の場合は半数以上が上気道炎に続いて発症し、39度以上の発熱を呈することが少なくありません。また感音難聴や乳様突起炎など重篤な合併症を伴うこともあり、早期診断と重症度判定に基づく適切な治療が重要となります。小児急性中耳炎診療ガイドラインは、2003年に発足した作成委員会により2006年に初版が出版されました。以降2009年の改訂版を踏まえて、昨年7月10日に2013年版が出版されました。以下に主たる変更点を示します。

## 【重症度分類】

急性中耳炎診療スコアの鼓膜所見から光錐の項目を削除、軽症は5点以下、中等度は6~11点、重症は12点以上とした。(臨床症状の項目は変更なし。)

## 【治療アルゴリズム】

- ・第1、2段階での抗菌薬投与日数を3日とし、改善があった場合に同薬を2日間投与。
- ・軽症や中等症での抗菌薬の変更を行う際には肺炎球菌迅速診断なども参考とする。
- ・中等度の第3段階、重症の第2段階、第3段階の抗菌薬としてTBPM-PI、TFLXが選択肢となった。
- ・抗菌薬投与時の下痢には酪酸菌製剤(ミヤBM®)が追加、反復性中耳炎に漢方補剤(十全大補湯)が推奨された。
- ・ワクチンの中でPCV(蛋白結合型肺炎球菌ワクチン)が小児急性中耳炎の予防に有効とされた。

他に急性中耳炎の分類(難治性中耳炎、反復性中耳炎、遷延性中耳炎)、ならびに病態に対する再燃、再発の定義が提案されました。小児急性中耳炎は近年、病態の変化や予防的治療法の発展から、治療の選択もより複雑なものになってきております。実臨床において本ガイドラインをご活用いただくとともに、何か症例でお困りの際には当院へご紹介いただければと存じます。